佐久市埋蔵文化財調査報告書　第168集

枇杷坂遺跡群

蔦石遺跡Ⅱ

長野県佐久市岩村田蔦石遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2009. 3

山　添　時　子

佐久市教育委員会

例　言

1．本書は、山添時子が行う集合住宅建設に伴う蔦石遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。
2．調査原因者　山添時子
3．調査主体者　佐久市教育委員会
4．遺跡名　　蔦石遺跡Ⅱ
5．所在地　　佐久市岩村田1266-6
6．調査期間　　平成20年６月20日～６月27日
7．調査面積　　62.6㎡
8．発掘調査の組織
調査主体者　佐久市教育委員会　教育長　木内　清
事務局
社会教育部長　　内藤孝徳
社会教育部次長　柳澤本樹
文化財課長　　森角吉晴
文化財調査係長　三石宗一
文化財調査係　　林　幸彦、並木節子、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也、神津　格、冨沢一明
　　上原　学、出澤　力
調査担当者　　須藤隆司
調査員　　土屋武士、中嶋フクジ、萩原宮子、細萱ミスズ、依田三男、渡辺長子
9．本書の執筆・編集は、須藤隆司が行った。
10．出土遺物および調査に関する記録類は一括して、佐久市教育委員会文化財課に保管してある。

凡　例

1．遺跡の略称　蔦石遺跡Ⅱ→ＩＥＴⅡ
2．遺構の略称　竪穴住居址 → Ｈ　土坑 → Ｄ　ピット → Ｐ
3．挿図の縮尺は、遺構1/80、遺物1/4である。なお、各図中にスケールを付したので確認されたい。
4．遺物写真の縮尺は、1/3で番号は挿図と同じである。
5．土層説明中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所色票監修1995年版『新版　標準土色帖』の表示に基づいた。

目　次

例言・凡例・目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 ―― 1
1．立地と調査経過 …… 1

第Ⅱ章　遺構と遺物 ―― 3
1．Ｈ１号住居址 …… 3

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1．立地と調査経過

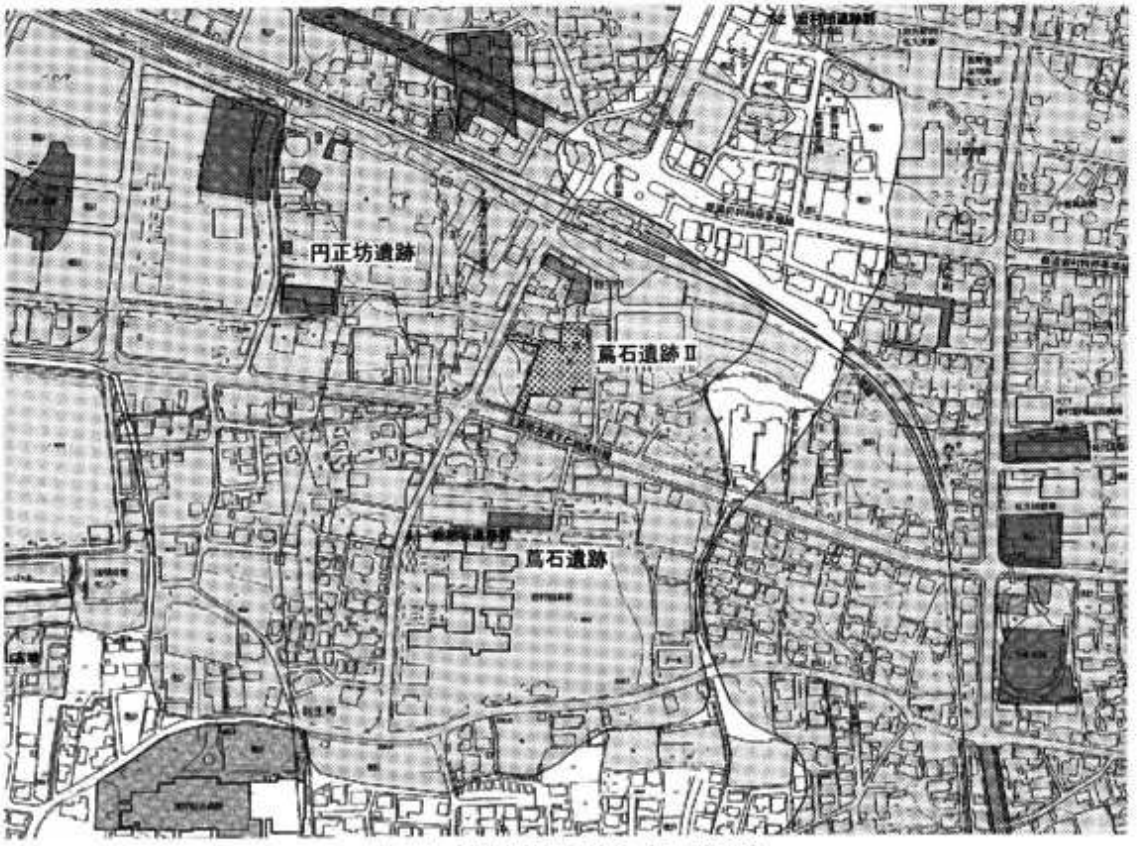
枇杷坂遺跡群は、浅間山南麓端部に発達した田切地形に展開した遺跡群である。田切地形とは垂直に切り立った崖で区画された帯状台地である。13,000年前、浅間山から噴出した超大規模火砕流の浅間第１軽石流が厚さ30mに及び山麓を埋め尽くした。その軽石流堆積物はもろく、水の浸食に極めて弱いため、垂直に崩落した浸食崖を形成したのである。佐久市北部の地形は、西南方向に伸びるそうした幾つもの田切地形からなる。それぞれの台地上は集落立地としての条件をそなえており、北から近津遺跡群、西近津遺跡群、周防畑遺跡群、芝宮遺跡群、長土呂遺跡群、枇杷坂遺跡群、岩村田遺跡群が確認されている。

佐久市岩村田に所在する枇杷坂遺跡群蔦石遺跡は、東側を久保田用水、西側を濁川に挟まれた帯状台地末端部に位置する。標高は702.8m程である。また、周辺の発掘・試掘調査から微地形を復元すると調査地北側に浅間第１軽石流堆積を浸食した浅い谷が形成され、台地から切り離された島状の微高地を形成していた時期の存在が想定される。

蔦石遺跡は、昭和62年11月に県立岩村田高等学校校舎建設に伴う発掘調査が行われ、台地南端部の傾斜地において弥生時代後期の壺棺墓１基が検出されている。また西側隣接地では平成19年10月に店舗建設に伴う試掘調査が行われ、弥生時代後期の竪穴住居址２軒が確認された。また、その試掘調査で北西に浅間第１軽石流を１m程切り込む上述の谷状地形を確認した。弥生時代の竪穴住居址の一部は自然流路で流失しており、その谷の形成時期の一端が示唆されている。遺跡周辺の台地末端部に展開する遺跡としては円正坊遺跡が北側に展開する。弥生時代後期、古墳時代中期・後期の拠点的な集落址であり、本遺跡はそれに連動する位置にある。

今回、山添時子氏が枇杷坂遺跡群に集合住宅建設を計画したため、平成20年５月１・２日に遺構の確認を目的とした試掘調査を実施した。結果、対象地の大半が攪乱（土取）の後に埋土されていたが、竪穴住居址（弥生・古墳時代）の存在が確認された。保護協議の結果、建物建設によって保存が困難な竪穴住居址（古墳時代）１軒の記録保存を目的とする発掘調査を実施する運びとなった。発掘調査は平成20年６月20日から27日の期間で行い、６月30日から平成21年３月25日の期間で整理・報告書作成を行った。

第１図　枇杷坂遺跡群　蔦石遺跡Ⅱの位置（●）　（1：50,000）



第２図　立地と周辺の遺跡（１：5,000）

第３図　発掘調査区の位置と試掘トレンチ（１：1,000）

写真１　発掘調査区（北東より）

写真２　発掘調査区（東より）

第Ⅱ章　遺構と遺物

1．Ｈ１号住居址

検出面は浅間第１軽石流である。調査地点は掘削・土取の後に80～100cmの厚さで埋土されていた。住居址の検出状態は、床面まで削平されており住居址周囲を回る堀方の残存により規模の知れるものであった。検出面は床面に近い状況にあるが中央部の状況では貼床等の構築状況は存在せず明らかに床面を削除した状況を示していた。堀方範囲として確認された住居址規模は、南北長4.6m、東西長4.8m、面積21.9㎡である。

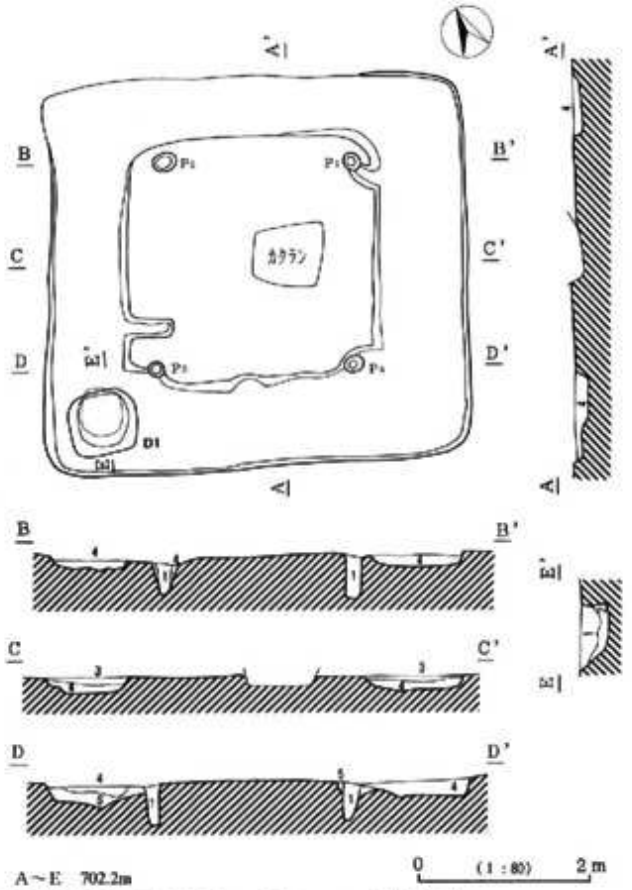
四本の主柱穴と土坑１基が確認された。Ｐ１は南北長18cm・東西長19cm・深さ53cm、Ｐ２は南北長15cm・東西長16cm（堀方：南北長20cm・東西長26cm）・深さ36cm、Ｐ３は南北長20cm・東西長18cm・深さ50cm、Ｐ４は南北長17cm・東西長19cm・深さ44cmの規模である。Ｄ１は南西隅に位置する。上面は南北長74cm・東西長80cm、底面は南北長55cm・東西長45cmの規模で、深さは32cmである。底面は北方向にずれ、北壁はオーバーハングしていた。いわゆる貯蔵穴と考えられようか。

堀方は、住居址中央を主柱穴位置を四隅として台状に残し四方の壁側を周溝状に掘り窪めている。その規模は、東壁側上面幅110cm・底面幅100cm・深さ15～20cm、西壁側上面幅90cm・底面幅80cm・深さ15～30cm、南壁側上面幅110cm・底面幅90cm・深さ20cm程、北壁側底面幅70cm・深さ10cm程である。北壁北西側は掘削が顕著でありその正確な規模は不明である。この点は、カマドの堀方と同定できる箇所は存在しなかったが、カマドの存否の確定を妨げている。堀方埋土はローム（浅間第１軽石流）と黒褐色土の混土であるが、下方がローム主体、上方が黒褐色土主体となる。

検出された遺物は、高坏・甕などの土師器片13点と所謂編み物石１点である。その出土状況はＤ１から編み物石１点、高坏脚部破片３点、甕破片２点、堀方埋土から高坏破片６点・甕破片２点である。

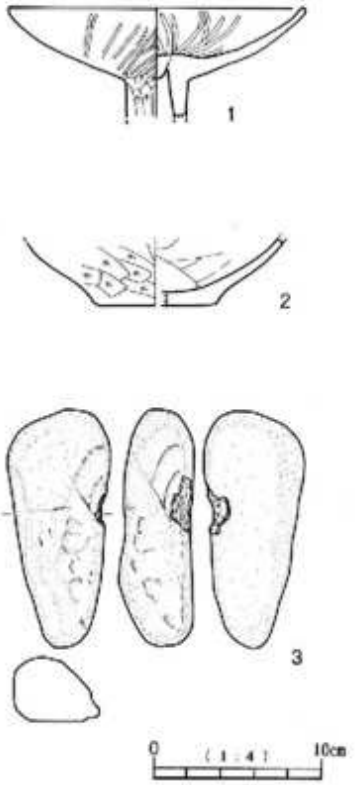
第５図に示した古墳時代の高坏・甕底部破片は東南隅堀方埋土から出土したものである。１の高坏は、内面ミガキ、外面ヘラケズリ→ミガキで、推定口径17.6cmである。２の甕底部は、内外面ヘラケズリで推定底径7.2cmである。３の編み物石は安山岩を石材とする。長さ141mm・幅61mm・厚さ44mm・重さ480.12ｇである。平面長楕円形・横断面三角形状を呈する円礫を用いたものである。右側縁中央やや上部に抉入部が形成されている。そのあり方は表裏の剥離痕と側縁の敲打状の潰れである。

写真３　Ｈ１号住居址（北より）



1層 黒褐色土（10YR3/2） パミス・ローム粒を含む。
2層 暗褐色土（10YR3/3） パミス・ロームブロック（～2cm）を多く含む。
3層 黒褐色土（10YR3/2） ロームブロック（～3cm）を多く含む。貼床。
4層 堀方埋土 黒褐色土（10YR3/2）とローム(10YR5/6)の混合土。
5層 堀方埋土 ローム主体、黒褐色土ブロック（～3cm）を多く含む。

第4図 H1号住居址全体図（1：80）



第5図 H1号住居址の遺物（1：4）

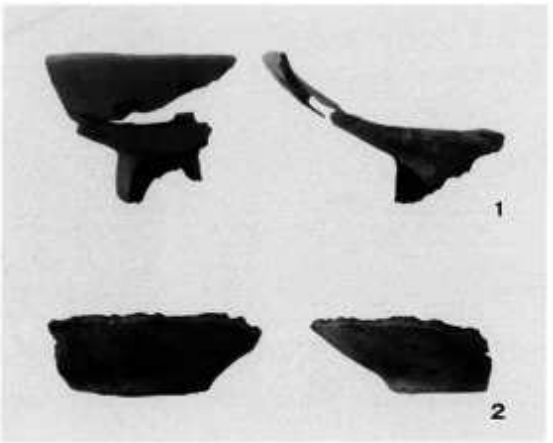


写真4 H1号住居址の土器（1：3）

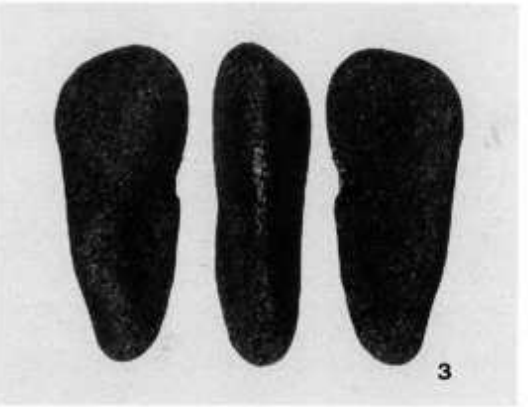


写真5 H1号住居址の石器（1：3）

写真6　重機で表土を剥ぐ（東より）

写真7　H１号住居址検出状態（北より）

写真8　住居址を掘る（北より）

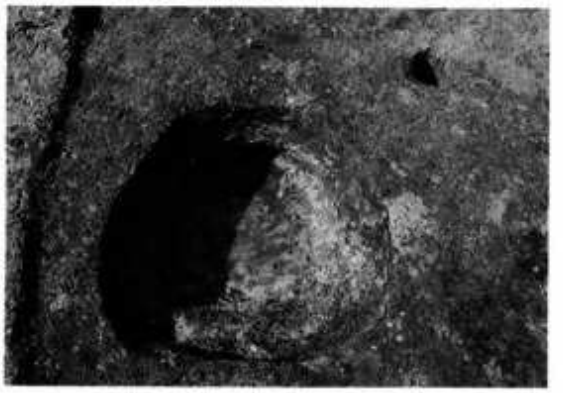


写真9　住居址の土坑（南より）

写真10　堀方を掘る（南より）

写真11　堀方埋土（南より）

写真12　H１号住居址堀方（北より）

写真13　H１号住居址堀方（南より）

報告書抄録

書名	枇杷坂遺跡群　蔦石遺跡Ⅱ
ふりがな	びわざかいせきぐん　つたいしいせきに
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第168集
編著者名	須藤隆司
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2009．3．25
郵便番号	385－0006
電話番号	0267－68－7321
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	枇杷坂遺跡群　蔦石遺跡Ⅱ
遺跡所在地	佐久市岩村田1266－6
遺跡番号	41
緯度	36°16′25″
経度	139°48′19″
調査期間	2008．6．20～2008．6．27
調査面積	62．6㎡
調査原因	集合住宅建設
種別	集落址
主な時代	古墳時代
遺跡概要	遺構　竪穴住居址1軒　　遺物　土師器（高坏・甕）・編み物石
特記事項	住居址堀方部分のみ残存。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第168集

枇杷坂遺跡群 蔦石遺跡Ⅱ

長野県佐久市岩村田蔦石遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2009年3月25日

編集・発行　佐久市教育委員会

〒385-8501　長野県佐久市中込3056

文化財課

〒385-0006　長野県佐久市志賀5953

TEL　0267-68-7321

印刷所　臼田活版株式会社